

スペシャルエッセイ

肝胆膵外科 奥田康司

図書館に関するエッセイを依頼されたとき、最近図書館に行ったことがないことに気づいた。電子ジャーナルが普及する以前は、文献検索にしばしば通うこともあったが、早々に目的の文献をコピーするだけで退出していた。それでも、医局秘書にコピーを頼む場合の方が多かった。電子ジャーナルが普及した今においては図書館に行く目的がなくなっていた。

一念発起、久々に久留米大学医学図書館を訪ねてみた。十数年ぶりかも知れないが、全く変わってなかった。その変化のなさがかえって私に安心感を与える。エントランスを通過して中に入ると、独特な書物の匂いと静寂が全体を包んでいた。2階の閲覧室には10人程度の若い人が本を読んだり、勉強をしたりしていた。1階の閲覧室には2人が同様に机についていた。彼らを図書が囲んでいる佇まいをみると、決して先進的ではなくアナログの世界であったが、非常に贅沢で豊かな空間に感じられた。一冊の本が目につき、机の上でページをめくってみた。「MEDICIN-A Treasury of Art and Literature. ed. AG Camichel and RM Ratzan. Hugh Lauter Levin Associates, Inc.」、決して最新の情報に関するものではなく、今から26年前に発刊されており、B4サイズで厚い立派な表紙がついた分厚い本。4000年前の古代エジプト時代からの医学、医療の足跡を歴史的絵画や彫刻、造形物などを参考にしながら記述している。芸術的で貴重な絵画の挿し絵がふんだんにあり、その世界に引き込まれてしまった。時代を超え、その時空を生きた人々の心に触れているような気がした。

もちろん図書館の機能は様々で、専門分野の特殊な情報を得るための全国的な検索システムも最近は随分と進歩している。求めている本が全国のどの図書館に収蔵されているかも簡単に検索できる。図書館の「閲覧室」とは「調べながら読む」ということだそう。決して本を熟読するという意味ではないようである。そして、活字媒体から情報を得る方法としては、電子ジャーナルがはるかに便利だろう。しかしながら、図書館の、周囲にバリアを張って読み手を本の世界に引きずり込むような空気感は他のどこにもない、代えがたいものだ。埃っぽいが重厚な本の一枚一枚ページをめくっていると、ある種超現実的なファンタジーに近い世界も感じた。煩忙な日常において、一時の心を癒す至福な時間を与えてくれた図書館に感謝。